



## Vocational Education and Training Research, Development and Innovation

謹賀  
新年

### 年頭のご挨拶 ～ 2020年、夢と志を持って～

全国専修学校各種学校総連合会 顧問・学校法人敬心学園 理事長

小林 光俊

あけましておめでとうございます。

昨年11月、文部科学省より「東京保健医療専門職大学」の設置が認可されました。

東京オリンピック・パラリンピックが華々しく開催される記念すべき本年、ここ東京から世界へ羽ばたく人材を養成する専門職大学が、敬心学園に誕生します。

昨年、敬心学園の専門学校5校は、1,564名（通信教育部584名を含む）の入学生を迎えました。その中で、高校卒業後すぐに入学されたのは235名（15%）です。ここ数年で「学び直し」という言葉が注目されるようになりましたが、まさに85%の方々は大学卒業生・社会人・無職（フリーター・主婦など）で、学び直しで入学された方になるのです。

世界では「学び直し」は決して珍しいことではありません。学び直しの方にも学位が授与されています。学士だけでなく、修士を取得する方も多くいらっしゃいます。

日本で「学び直し」が広がらなかった背景には、大企業からの要望がありました。「企業内教育をするから、素材（新卒人材）だけ提供して欲しい」という大企業の要望に応え続けた結果、日本の企業は世界から後れを取ってしまいました。

これから国際社会で日本が力を発揮するためには、「学び直しの拡充」や「職業教育の質の向上」といった高等教育の方向転換が必要です。十数年後には「大学院大学（大学院を中心とした大学）」で国際的な勝負ができるような教育を進めていかなければならないと感じています。

専門職大学の認可は、スタートラインです。まだ、ここから、ホップ・ステップ・ジャンプと超えなければならぬ課題は多くあります。本年も夢と志を持ち、日本の職業教育の発展に力を尽くしていきたいと考えています。



#### 第11号の掲載内容

	1	年頭のご挨拶 ～ 2020年、夢と志を持って～ 全国専修学校各種学校総連合会 顧問・学校法人敬心学園理事長 小林 光俊
特集 連載	2	【介護教育と方法論】介護ロボットへの対応- 3 - 株式会社 健康データハウス 代表取締役・聖隷クリストファー大学 教授 大川井 宏明（職業教育研究開発センター 特別研究員）
連載	4	研究の仲間と、最新の動向を学ぼう 4 学校法人さわらび学園 村川 真一（職業教育研究開発センター 客員研究員）
連載	6	第3回 アクティブ・ラーニングを考える 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター センター長 川廷 宗之
報告	8	第11回公開研究会 開催報告 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター 編集部
紹介	12	中国北京における日本児童教育専門学校の乳幼児研修の取り組み 日本児童教育専門学校 副校長 阿久津 撰
報告	13	ERIA委託事業 'Modelling Human Development and Circulation of Long-Term Care Workforce'を 受託 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター 杵渕 洋美
告知・ 募集	13	敬心・研究ジャーナル 第4巻第1号（2020.6.30発行）投稿原稿募集 及び お知らせ
告知・ 募集	14	第17回 職業教育研究集会の開催案内・演題募集
告知・ 募集	15	文部科学省委託事業 成果報告会のご案内
告知・ 募集	16	教員研修のご案内・次号予告


 特集  
連載

## 【介護教育と方法論【介護ロボットへの対応-3-】

株式会社 健康データハウス 代表取締役  
 聖隷クリストファー大学 教授  
 大川井 宏明  
 (職業教育研究開発センター 特別研究員)

介護職はボランティアではなく、プライドをもってサービスを持続させる職業（プロフェッショナル）であることを前号（第2回・NL第10号）で述べた。これはたとえ発端が善意であっても、それだけで持続させることは不可能な状況にあることを意味した。そこで、この第3回目は、持続性をもつ科学的なサービス、持続性をもつプロフェッショナル、介護職と被介護者の社会貢献について述べることでまとめとしたい。

## 1. 知りたいこと、考えたいこと、それは真の満足

「被介護者に満足してもらうことが嬉しい。」これは介護職のすべてが日々の仕事で目指していることであろう。では、満足と何か。この満足にも持続性が必要で、そのためには身近な科学が必要となる。

では、持続性のある満足とは何だろうか。それは、今日の満足が翌日、翌週、翌月の満足につながるかということである。

例えば、①単に筋肉負荷を除くことで、被介護者が「楽で良かったよ」という前後関係のないその日のみの満足と、②筋力を維持させる目標を掲げ、被介護者が納得し、あるレベルの負荷をかけた介護を実施する。被介護者は後日「あの時は少し大変だと思ったが、だんだんと動作が楽になってきたよ」というストーリーをもつ満足、をとりあげる。

そのとき限りであれば、①は考える要素がないため素人でもできる。これに対し、②は経緯を理解し今日と明日以後の計画を考える必要があるため実験、観察、意思伝達、他との比較とデータ整理等の要素が必要となるため、科学である。介護職でないときできない。

そこで話をその身近な科学へ移す。介護職は、被介護者に対し持続性のある満足を生むサービスを提供するためには自分が何をしたいか、どうなりたいか、このような願望、目的を描き、他に伝えることが必要だと思う。これは他の多くの職業と同様である。

併せて、謙遜さを背景に置きながら自分のプライド

も描き、これも同業者にも被介護者にも堂々と言えるような雰囲気を作りたものである。

この工夫、努力は次のような可能性を生む。①被介護者に自分の願望や夢を話すことで、被介護者は介護職の役に立つことを考え助言する等の機会をもつ。このことで、②被介護者は生きがいをもち自分をいかなる形で持続させるか考える端緒を得る。③双方が法や権利を持ち出して対等だと主張するのではなく、納得した上で建設的に共生する環境を作る。これらは、被介護者の大部分が幾多の人生経験をもち、とくに今後は学歴、職歴、プライドをもつ世代になってくるからこそ可能なのではないか。

## 2. 異業種の人にも理解する目的・目標をもつこと

さて、科学的な思考をしようという雰囲気になった。では介護の目的は何か、被介護者の満足を考えたそのときどきの目標値はどのレベルか。まず目的と目標について同業種、異業種の人たちと話し、共生や連携を目指すために、標準化、PDCAサイクルに載せる方法を考える段階になった。

ここでプロフェッショナルである介護職の本格的な出番になる。例えば、①「自立」支援の技術、動機付け等を心と身体の活性につなぎ、本来の「自律」に向かうこと。②要介護となった原因を探索し体系化することで、介護の予防へ向けた建設的な健康づくりを社会に向けて発信すること、③認知症その他の精神障害に対して医療職の視点を学びながら介護職としての新たな視点で観察すること、等が考えられる。

火災の例を出すと消火活動を安全に速やかに実施す



る方法、併せて防火とその関連の安全対策、火のありがたさと怖さの勉強を同時進行で進めてきたことと同様である。

### 3. 標準化とPDCAサイクル

目的、目標値を日常的に考え、仕事は科学的に行なうという認識をもつ段階になった。次は、同業種、異業種の人との協力体制に入り、特にエンジニアとの会話・交流を可能にするために標準化(基準化)の段階に入ることになる。

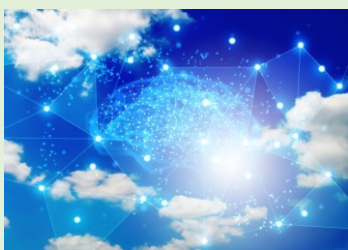
それは、介護の思想、各種の用語や技術およびその選択方法、実施する際の程度・順序・制御(加減方法)、次の技術の選択基準、被介護者の応答や心理、標準化に向けたその他の工夫を指す。この過程はまさに学問である。中でも、名は体を成すというように特に用語は重要となる。

日本は特に1960年代から80年代に、水と油の医学と工学を基に医工学という新たな学問分野を創出した。この快挙を成し遂げた要因の一つは、徹底した用語の標準化(基準化)だった。検査法と画像等の表現法、機器の仕様と操作法、疾患名とその原因・度合い、治療法とその理由と程度等において大胆に実施した。

その結果、その標準化用語は、医工学研究者のみならず医師、エンジニア、臨床検査技師、営業職等が会して、同じ土俵で議論することを可能にした。このことがわが国の世界最先端の高度医療技術を構築する過程で核となったと筆者は解釈している。

医工学以外の分野においても標準化とPDCAサイクルは実施されてきた。これまでの経緯を観ると、特に工学と連携した分野は、例えば低コスト化、精度や再現性の向上、それまで像を描くことができなかった新たな創造に成功し、普及発展してきた。

では介護はどうか。もはや興味の有無を問う次元ではなく、速やかにPDCA、異業種連携、標準化の流れを作ることが重要課題であると筆者は考えている。ただし、次節に述べる歴史的な課題を背負っている。だから「介護職だからこそ」となるのだ。



### 4. 何千年何万年にわたり知りたかった課題、人間とは

介護はまさに人間学ではないか。人間とは、四書五経の頃、またはそれ以前から現在に至るまで考える課題であり続けてきた。

第1回目(NL第9号)に「介護職だからこそ」として提案したように、介護は人の心の痛みと喜びの両極端を知る職業である。介護職だから(だったから)こそ、被介護者だから(だったから)こそ可能な、新たな職業の8例を提案した。第2回目(NL第10号)には心の土器の発明を期待すると述べた。

豊かな衣食住、これに向かって人類は700万年努力した。これを日本では概略1990年に達成した。これが人間に幸福をもたらすはずだった。しかし、この活用の仕方が不十分だった。

このため、疾患の罹患者、要介護者が増加した。産業と学問は停滞した。いま正に、人間学、生命学、プライドと謙遜、人に対する敬意、および自然(神)に対する畏敬を融合型で考える、新たな学問とサービスを創出する時が来た。

だから介護職の出番なのだ。介護ロボットや人工知能(AI)を考えることはその端緒の一つとなり得る。そのための目的、目標、手段等を考える機会をもつことは介護職の役得であり、日本の介護は後になって学問や技術の歴史上で四書五経や土器に並び尊敬、羨望の対象になるものと筆者は考えている。



3回にわたってお届けした、大川井先生の連載は今号で一旦終了となります。これからの「介護職のあり方」、「介護職だからこそできること」、温かいエールとともに、多くのご示唆を頂きました。

(編集部)

連載

## 研究の仲間と、最新の動向を学ぼう 4

## 職業教育研究へ 関連書籍（一部）紹介

前号はお休みさせて頂きましたが、連載を再開します。様々な職業教育に従事している皆さんに向けて、新たに「職業教育」に関する文献を2冊ご紹介させていただきます。（編集部）

執筆：学校法人さわらび学園 村川 真一

（職業教育研究開発センター 客員研究員）

## 『日本の産業教育 – 歴史からの展望 –』

（2016年6月30日、三好信浩、名古屋大学出版会）

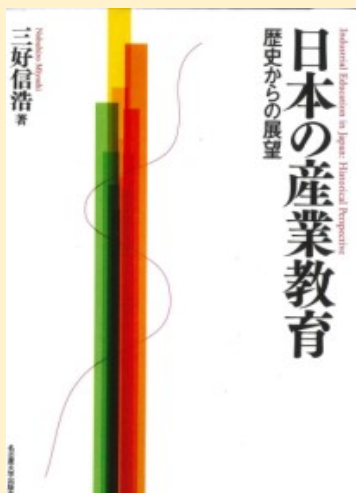
## 1. 職業教育の歴史から何を学ぶか

本書は、職業教育など「実践的で役に立つ」教育を、歴史展開を確認しながら問い直している。西洋を見本として始まった、日本における近代産業教育の歩みや女子教育、地方での産業教育も含め一望している。

特に、渋沢栄一の「資源も資本も乏しい日本において人づくりが重要である」や、長谷川如是閑(にょぜかん)の「日本における教育制度は、大量生産による人間供給の機関としたことへの問題提起」など、教育家の思想や実践に着目し、産業教育において学校が果たしてきた役割にクローズアップしている。さらに、現代の産業社会が抱える教育の課題と、渋沢や長谷川の生きた時代の教育課題とがオーバーラップしている問題もある。そのような問題の改善・解決のために、産業教育学という学問を通して一石を投じる貴重な文献の一冊である。

## 2. 幅広い視野からの展開

この本の著者である三好信浩は、1966年に「英国公教育制度成立課程の研究 ケイ・シャトルワースを中心にして」をまとめている。その後もこれまで日本における産業である農業、工業、商業などについて、歴史的展開から問い直す著書を多数発表している。



## 3. 日本の産業教育の今日課題

本書の、特に、第10章の『現代産業社会の教育課題』では、戦後の教育について教養教育と専門教育の関係が大きく分化されたことに対する問題を提起している。教養教育としての普通科より、実践的な職業教育を主目的とする職業科が軽視されるようになったことをとりあげている。

また、戦後日本では、学校は知育（あたま）・徳育（こころ）・体育（からだ）を主体とする、社会とは区別された独自の世界にこもり、企業は企業の論理である経営の効率化による利潤の獲得を目的にして、採用した学卒人材を企業内で訓練（企業内訓練では、必要とする学科の授業を取り入れる場合もあるが）してきた。しかし、学校における授業と企業の訓練には大きな違いがあると問題提起している。

その結びにおいて「人が生きることは、具体的には職業を離れては考えることはできない」「明治以来の教育では、普通教育から職業教育へ、一般教育から専門教育へと学生の心身の発達段階に応じた教育が重んじられてきた。この順序が義務教育の諸学校において貴重となることは認められてよいが、個性の職業（その学生がなりたいたい仕事）への志向から言えばその順序は逆であり、職業教育の中核から一般養育の外皮が生じてくるのである」と教育の順序についての改善を考えるための提案をして本書を締めくくっている。

この考え方は、ユネスコなどの資料に見られるような、職業教育を教育の基本的機能と位置付ける考え方とも一致しているともいえる。特に、職業教育なしには、人にとっての最善の教育を検討することさえできないのではないかと主張している点は、考えるべき問題提起であろう。

## 『「ものづくり」と職業教育

## —工業高校と仕事のつながり方』

(2016年4月12日、片山悠樹、岩波書店)



## 1. 「ものづくり」教育という視点から職業教育を捉える文献

本書は若年層の職業への移行が恒常的に不安定である中、教育にできることはあるのか、社会的に関心が高い「職業教育」の可能性と限界を、工業高校の「ものづくり」教育を手掛かりに考えている。また、どのような知識や技能について、その有用性や価値を、誰が、何を基準に、どのように承認し、それはどう活用されているのか等の、職業教育の是非や効果をめぐる議論に一石を投じており、文献自体が実証研究となっている点が大変興味深い。

## 2. 「ものづくり」とは

本書のタイトルにある「ものづくり」という言葉を耳にすることはよくあるが、私たちは、この言葉をどのように理解しているだろうか。「ものづくり」から連想することとして、工作機械が並ぶ製造現場、職人の高度な技術、飽くなき探求心・情熱を連想する人も多いのではないかと。言葉としては知っているが、意味としては曖昧な「ものづくり」という言葉の定義や厳密な意味を問うのではなく、「ものづくり」に対する理解の仕方に焦点を当てながら、教育と仕事のつながり方を描くことも本書の主題となっている。

## 3. 工業高校と「ものづくり」

本書では、「ものづくり」をレンズとして、仕事とつながる知識が教育システムでどのように生み出されるのか、そして仕事とつながる知識はどのような機能を果たしているのか、教育のなかでも「ものづくり」と密接に関係している工業教育（工業高校）の事例を中心に考察している。

「ものづくり」＝工業高校教育ではなく、「欲しいモノを自分で作りたい」、「人にとって必要なモノを自分で作りたい」などといったことから創作意欲が沸き、そしてイノベーションのきっかけにもつながる「ものづくり」から、職業教育をどう考察するかが出

きる文献である。

現在、多くの工業高校では教育目標として「ものづくり」が掲げられており、「ものづくり」教育は高い評価を受けている。工業教育＝「ものづくり」という認識は教師たちの間では共有されていると言えるが、こうした認識は最近まで自明ではなく、かつて教師たちは「ものづくり」に批判的であった。なぜ現在の教師の認識と、過去の認識に違いが生じているのか、本書では工業教育で「ものづくり」がいつ「自明」となり、その背後要因には何があるのかを以下の様に整理している。

## 4. 地域に根付くことでの復活

1970年から1980年代、工業高校の社会的地位は低下していたものの、教師は「科学的／批判的能力」の養成を重視し、「技能教育」に否定的であった。1980年代後半以降、工業教育の専門性はさらに弱体化し、多くの教師は専門的工業教育への自信を失っていった。このような状況のなか、工業教育の再興のため、教師は地域の中小企業との連携を模索しはじめる。1990年代後半、「ものづくり」の受容は中小企業の密集地帯で顕著にみられたが、2000年代に入ると、「ものづくり」言説に「教育的」価値が付与されることで、他の地域にも浸透していったのである。こうした過程を通して、工業教育のなかで「ものづくり」の「自明化」が進展したと推察できる。

## 5. 改めて確認。職業教育には、夢がある。

1にも記したが、本書は実証研究を行いながら議論を進めている。「ものづくり」の「もの」が、有形であれ無形であれ、人が欲するモノ、望むモノを創造するための教育（特に職業教育）は多くの現実的な夢を持ち得る教育であると改めて再確認するきっかけとなった。



## 連載

## 第3回 アクティブ・ラーニングを考える

 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター  
 センター長 川廷 宗之

授業は、学生が中心となって作る。

学ぶ努力をしなければ、知識も技術も身につかない。

### 《真の実力をつけるために》

最近の国家試験問題を見ると、筆者の観察では、一見知識試験の様に見えるが、かなり実践的な問題が多くなっている。国家試験とは、実際にその業務についたとき、間違いなくその業務を執行でき、危険なことにならないかどうかを判定する試験なのだから当然である。従って、授業はその目的を達成するために行われる。では、どのような授業を展開したら、学生はその業務を的確に実践でき、かつ国家試験に受かるのだろうか。

### 《基本は、体験を言語化して知識に》

その最も基本は、第1回（NL第9号8～9頁参照）に書いた様に、まずは実習や実技の演習を行ってみながら、その行為や利用者（顧客・患者など）の反応を体験し、それを言語化していくことである。人間の五感（第六感も）をすべて働かせ、一つ一つ実技演習をしながら言語化し知識として累積するのは時間がかかる様に見えるが、耳と目しか使わず、そのためにすぐに忘れてしまう知識を何度も詰め込み直していくよりははるかに速い。しかし、これはある意味で、学習の仕方という『質』の問題である。

### 《学習方法の支援は重要》

体験を言語化しさらに知識として蓄積し、応用を含めて活用していけるようになるには、単なる体験の知識だけではなく、知識間の体系化や構造化も重要である。筆者は、国家試験の学習をするために、意味も考えずにひたすら同じ単語を繰り返し書いて覚えるという学生に出会って、吃驚した事がある。日本の高校以下の教育では、とにかく覚えるという丸暗記の勉強として、こういう方法も行われているようだが、何も考えないで繰り返ししても効果はきわめて限られる。それよりも具体的なイメージが浮かぶ、知識相互間の体系を考えたり、構造化を試みたり、それらを図解したり表にしてみたりするなどしていく方が、よほど身についた知識となり得る。こういう学習の方法を支援することは極めて重要である。

### 《国家試験に受かる学習量の確保》

しかし、学習の質が高ければ国家試験に合格できるかと言うと必ずしもそうではない。一定の学習量が必要であるし、学習量が多ければ多いほど、合格可能性は高まる。とすれば、学生支援の第二の課題は、どれだけ多くの時間を学習に充てる支援をするかということである。あまり考えない人も多いが、この学習時間は大きな問題である。この学習時間の累積差を象徴的にまとめたのが、表-1の「累積学習時間・比較表」である。その累積差は極めて大きく、取り戻すには小学校から高校までだと年単位で時間がかかるし、専門学校の場合でも3か月もかかる。現実的にこういう回復措置は不可能だろう。しかも更に問題なのは、学習時間は累積するに従って幾何級数的に能率が上がっていくという点である。

小学校から高校まで毎日1時間半の学習をした人の学習の能率と、そうではない人たちでは、専門学校在籍期間中の学習時間は同じでも、その実質的な量ではかなり差が出ると言ってよいであろう。

### 《どうやって学習量を確保するか》

では、学生が授業外で1日1時間半程度の学習を行う様にサポートするにはどうすればよいのか。基本は、宿題を課すことである。又、その宿題を課すことで「国家試験合格」という明確な目標を自覚させることである。そのために重要なのが、「シラバス」である。つまり、シラバスの本来の意義は、単なる授業概要ではなく、学習の手引きなのである。従って、今回の授業展開のTipsは、【シラバスをどう創るか】としよう。

表-1 累積学習時間・比較表

	1時間半／1日当たり	30分／1日当たり	累積差	回復に必要な日数
小～高12年間	累計 6570時間	累計 2190時間	4380時間	約1年半 日8時間
専門学校2年分	累計 1095時間	累計 365時間	730時間	3か月強 日8時間

作表：筆者

授業展開の  
 Tips

## 【シラバスはなんのために創るのか】

- 学習の**目的・目標**を明確にし、その目標に到達するために**達成課題**を明示し、その達成課題をクリアするための毎日（回）の**自己学習の内容と方法**を明示するため。
- 学生の**学習の手引き**をするため。



### シラバスのポイント1. 学習の目的・目標を明確に

シラバスの冒頭、あるいは序文的な位置づけで、その学習を行うことでどういう**目的（目標）**に到達できるか、またその目的に到達できると、**どんな素晴らしい人生が展開できるか**の可能性を豊かに紹介し、学習への招待を行うこと。



### シラバスのポイント2. 達成課題を明確に！また評価基準と方法を明確に示す

「成績評価」や「評価」の項目で、**どういう基準で評価するか**、その内容を具体的かつ明確に示す。例えば「利用者と専門的なコミュニケーションができるか」といった内容になる。さらにこの内容を細かくし、「利用者の要望を正確に聴けるか。」「自分の意見を適切に相手に伝えられるか。」「他職種の人に利用者の状態を必要な範囲で伝えられるか」などの**小（評価）項目を示す**ことが望ましい。

**評価方法**も「事例に即して回答する」とか「ロールプレイをVTRで記録した上で、そのプレイ内容で評価する」（この方法は職業教育ではかなり有効である）など、**具体的に示しておく**。評価方法で、「筆記試験で〇〇%、出席状況〇〇%で評価する」といったシラバスの記述を見かけることがあるが、これは、「評価内容」も「評価基準」も示されておらず、学生に何も伝えていないに等しい。



### シラバスのポイント3. 毎回の学習内容と、それを行うための予習課題の提示

学習時間を確保させる最も重要な項目。毎回の授業のテーマ、そこで学び取るべき達成課題、そのために学生が授業中に行う活動（教員が行う支援の内容）、そのために必要な**予習課題の内容と学習方法**等が紹介されていなければならない。しかも重要な点は、この予習課題（アサインメント）の内容は、五感すべてを働かせて行う、**楽しめる課題**として出題することである。やむを得ない場合もあるが、「テキストの〇〇頁から〇〇頁までを読んで、あなたの意見を用紙にまとめてきなさい」といった課題は、職業教育にはあまり向かない。むしろ「〇〇の場所で〇〇の活動を行って、注釈をつけた絵（マンガ）又は図にまとめてきなさい」という方が取り組みやすいであろう。そして、この課題は、当然回を追うごとに内容（方法ではない）のレベルが上がっていき、**達成課題に結びついていく様に設定**されていなければならない。



### シラバスの他の要素・・・

シラバスには、その他の授業の要素（例えば、指定文献など）も紹介しておく必要があるが、基本は上記3点であると言ってよいだろう。そして、第1回目の授業時にこの内容を丁寧に説明し、学生達が達成課題をクリアする意欲を喚起し、多少頑張る努力すれば達成できそうだという希望と自信を持てるように支援する必要がある。

シラバスを活用する授業展開は、次回紹介しよう 

## 報告

## 第11回公開研究会 開催報告

## 「違う」って面白い！！

## ～世代、国境を越えた介護・保育の実践～

12月8日（日）13：30～16：00 @TAP高田馬場

これまでの公開研究会でもダイバーシティ（多様性）のテーマは取り上げてきましたが、今回は**介護・保育**分野における**異世代交流**や**異文化協働**に焦点をあてました。

①地域を巻き込んだ高齢者と子どもの異世代交流の実践事例について、②外国人職員が多く参入してきている介護現場、外国人利用者が増えてきている保育現場における、それぞれの異文化協働の実践について、大変面白い取り組みをされている法人から講師・シンポジストをお招きし、先駆的な取り組み事例の報告、意見交換を行いました。

当日は、介護・保育の実践者、大学・専門学校教職員、関連企業・団体の方、学生、報道関係者等、57名の方にご参加頂きました。多くのご参加ありがとうございました。

※なお、本公開研究会は、文部科学省委託「2019年度 介護・保育分野における異文化間異世代間の交流促進のための分野横断型リカレント教育プログラムの開発事業」の学習会を兼ねて行われたものです。



## ■ 開会挨拶

冒頭、学校法人敬心学園職業教育研究開発センター川廷宗之センター長より、現在の社会的状況の中で、単に外国人や異世代ということではなく、一人一人の相互理解ができなくなっているという状況があること、日常の中で、一人一人違うのは当たり前で、その違いをどう受け止め協働していくか、ということが出来なくなっているのではないかと、との問題提起がなされた。

## ■ 基調講演

## 多世代型コミュニティゴジカラ村ってどんなところ？

大須賀 豊博 氏

（社会福祉法人愛知たいようの杜 理事長）

## 1. ゴジカラ村とは？

ゴジカラ村は、愛知県名古屋市の隣、ベッドタウンの小さな街、長久手市の敷地面積3万㎡の里山に広がっている。5時までの時間は会社の中で数字や効率、成果が求められるが、ここでは5時からの時間にいる人（子ども、高齢者、地域の人たち）を大事にしようという意味で、ゴジカラ村と名付けた。

長久手市の高齢化率は16.4%、平均年齢は39.9歳で日本一若い街。全国元気指数調査では3年連続1位。

ゴジカラ村には特別養護老人ホーム、ケアハウス、デイサービス、幼稚園、保育園、看護の専門学校、生きがい支援のための古民家等があり、小さな子どもから高齢者、地域の方等、毎日800～900人ほどが入り出している。

ゴジカラ村を作ったのは、現長久手市長の吉田一平氏。



高度経済成長の中、懸命に働いてきたが、体を壊し療養を余儀なくされた時、雑木林や田畑がまだあった長久手市（当時は長久手町）が、名



古屋市から伸びる地下鉄によって、山が削られ宅地化していく姿を目の当たりにした。「自分の故郷の風景がなくなる！何とかしなければ！」と切実に感じた吉田氏。住宅が増え、子どもも増えてくるならば、今ある雑木林や山を生かした幼稚園を作ろうと考え、一念発起した。

## 2. 特徴的な考え方・・・地域の力を存分に借りる

「愛知たいよう幼稚園」設立後、雑木林の中で子どもたちは日々思い切り遊んでいたが、ある時先生から、今の環境では、森の中で駆け回る子どもたちの行動に目が行き届かないので困る、との声が挙がった。しかし、当初目指したのは森の中でひたすら子どもたちを遊ばせることだった。どうすれば良いか悩んだ吉田氏は思い切って地域の人の力を借りることにした。そして、たくさんの中老年のボランティアが見守りのために入ってきてくれた。

その後、特別養護老人ホームを作ったときにも同じ壁にぶつかった。多忙で1人の高齢者にじっくり関わらず悩む介護職員。割り出してみると、利用者一人あたりに職員が関わるケアの時間は24時間中たった2時間。残りの22時間は利用者にとっては寂しい時間だった。職員を増やしても、関わる時間が2時間から3時間に増えるだけ。介護職員だけでそれを埋めるのは無理だと気づいた。そこで、今度は施設の中に子どもたちに入ってきてもらう仕組みを作



った。次にたくさんのボランティア、さらに動物も飼い始めた。そういう様々な存在で隙間を埋めていく方法で、利用者の孤独が少しでも和らぐよう考えた。

### 3. 誰もが役割と居場所を持つ・ゴジカラ村の仕掛け

ゴジカラ村では、全ての人達に役割と居場所を作ろうとしている。子どもの役割は高齢者に元気な姿を見せることで孤独を和らげる。一方、寝たきりの高齢者にも役割はある。核家族が多いこの時代、年を重ねた姿を子どもたちに見せるということも大切な役割と捉えている。

また、人とのつながりのある暮らしを意識し、多世代が混ざって暮らせる仕組みを作っている。特別養護老人ホームでは、居室やリビングの配置に工夫し、外を向いて暮らせるように、ケアハウスにはふぐ料理の専門店を入れ、施設の人だけでなく、地域の人、学生が食べに来てくれることを狙った。「多世代住宅ぼちぼち長屋」は、高齢者とともにOLや子育てファミリーが暮らせる場所。古民家を移築した「どんぐりの杜」では、生きがい支援として地域の子どもたちを365日、朝7時～夜7時まで、地域の人達が交代(有償)で預かる。他にもたくさんの仕掛けがある。大切なのは柔軟に考えること、視点を少し変えてみることだ。

従来は労働人口の方が圧倒的に多かったために、世の中は会社の価値観で回っていてもおかしくなかった。今はそれが逆転しており、「暮らし」の価値観にシフトする必要がある。大切なことは、

- 手間暇をかけ、遠回りをするを厭わない  
=大勢が参加することで、皆に役割と居場所をつくる
- おおらかになる=折り合いをつける=互いを責め合わない(ほどほど、ぼちぼち、だいたいでもいい)
- 会社の価値観(数字、効率、成果)を地域や家庭に持ち込まない
- よいことも悪いことも含めての人の暮らし(わずらわしさをよいことと捉え、おおらかに暮らすこと)

人生をゆっくりと楽しみたい人たちが集まる「時間に追われない国」

時間に追われない国	時間に追われる国
【生活する集まり】 地域や家庭の子供や高齢者のいる暮らしの場 いろいろな人々が一緒に暮らす	【目的がある集まり】 企業、役所など働く人たちのいる仕事の場 同質の人たちを集める
遠回りすれば多くの人を楽しめ、多くの人に役割と居場所が生まれる	目的に向かって最短で最高の効率で結果だすために専門化、分業化してきた
存在することに価値がある	能力価値を大切にす
形容詞の世界だから、よくもめる	数字、効率の世界は、追われ続ける
人の数ほど答えがある	正解があると思っている
雑木林のように、いろいろな人がいろいろなありよう暮らし、解決とか完成にはほど遠いが、でも立つ瀬がうまれてくる	問題を見つけ解決したり、ものごとを完成させることを目指すために、不要なものは切り捨てられたりする

たくさんの仕掛け、仕組みにより様々な世代の人が自然に混ざり合う暮らしを実現させているゴジカラ村。

「ぜひ煩わしいことを大切に、共に豊かに楽しんでいきたい」との言葉で締めくくられた。

## ■ シンポジウム

### 介護・保育分野における異文化間交流の実践

後半のシンポジウムでは、コーディネーターの蔵本氏(特定特定非営利活動法人 外国人看護師・介護福祉士教育支援組織・理事)の進行のもと、2名のシンポジストから介護施設、保育所それぞれの場での異文化間交流(協働)の実践報告を頂き、基調講演講師の大須賀氏も交え、会場を含めた意見交換を行った。

#### ① 介護分野より

井口 健一郎 氏 (社会福祉法人小田原福祉会 高齢者総合福祉施設 潤生園 施設長/人財開発部 部長)

#### 1. 外国人介護人材受け入れの経緯と現状

現在、小田原福祉会では、技能実習制度でインドネシア人6名、在留資格「介護」でネパール人4名、ワーキングホリデーで韓国人2名を受け入れている(2019.12月時点)。

もともと外国人技能実習制度に対しては、マイナス面の報道が多く、同法人としても誤解があった。一方で、小田原福祉会では5年前から、今後高齢社会を迎える諸外国からの要請により、海外からの視察受け入れや、現地での介護教育指導を行ってきた。技能実習制度の目的は、介護の人手不足を埋めることではなく、あくまでも日本の優れた技術を海外に移転すること。人材育成に力を入れてきた法人だからこそ、日本のモデルケースを作っていかなければという思いから、この分野に参画することを決意し、2017年より受け入れにあたってのプロジェクトを開始した。



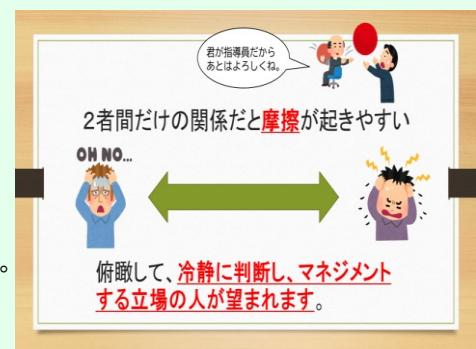
#### 2. 技能実習生受け入れのポイント

##### ●外国人を育成する職員のストレスマネジメント

安易に外国人を受入れて、その育成の責任を全て中堅職員に担わせることはしない。

##### ●プリセプター教育制度の実践

小田原福祉会では実習責任者(アシリエイター)、指導員(プリセプター)、新人というトライアングルの関係を作っている。一人に職員育成の責任を押しつけない。皆で育てていくという体制整備が必要。



##### ●異国での生活者として支える

外国人職員をただの労働力として見るのではなく、一人の生活者として組織全体で支えること。

外国人というレッテルを貼らず、人間としてみる。文字面だけの異文化理解ではなく、協和が大切である。

日本人がどういう環境で育ち、どんな文化を持つのか、また日本でどういう暮らしをしているか、理解してもらったうえで育成することが重要である。

## ②保育分野より

真島 里佳 氏（社会福祉法人どろんこ会 郡山どろんこ保育園 園長／メリーポピンズ蕨北町ルーム アドバイザー

### 1. どろんこ会の紹介

社会福祉法人どろんこ会は、「にげん力。育てます。」を理念に、保育、発達支援、地域子育て支援、病児保育、学童保育などの事業を運営。裸足保育、異年齢保育、屋外活動を大切にしている。



保育園も地域によってはたくさんの外国人が保育所を利用するようになってきた。利用者への多様性に対応し、今後はHPを中国語や英語でも展開していく予定である。

### 2. いくつかのエピソードから異文化理解を考える

#### 【両親共に外国籍の利用者を受け入れた事例】

受け入れ当初は言葉の壁があり、子どもも園で泣いて過ごすことが多かったが、通訳アプリやイラストを使う等の工夫でコミュニケーションが取れるよう模索した。また、子ども同士が支え合う姿から保育士の方が学んだ。子どもたちが独自で始めた遊びを通して、その子の文化に触れながら、園での生活が皆にとって豊かになっていった。

#### 【個を尊重しながら、文化を超えてつながった事例】

まだそれほど寒くないのに厚着をしてくる、食事を少しだけ残す等、生活感覚・文化の違いから、お互いの「どうして？」が多くなる。しかしある時、日本人に寄せよう、日本の習慣に寄せようとしている自分たちに気づいた。「私たちの当たり前は、外国の当たり前ではない」、「外国人のAさんの困り事や心配事を、〇〇人だからではなく、Aさんが困っていることとして見ていこう」という姿勢に変わった。当初は、外国人利用者の不安感を十分に受け止められていなかったり、他の子どもたちと一緒にできないと思いついたことでの保育の行き詰まり感、否定的な感情があった。しかし、子どものために本音で語り合い、想いをぶつけ合う中で、保育士にも価値観や考え方の変化が生まれた。心を開いて理解し合う、そして新しい環境を創り上げることに楽しさを感じられることが大切である。違いには必ず理由があることをお互いが認識し、歩み寄り、尊重する。日本の文化は「皆と同じように」と協調性を求めすぎるきらいがある。しかし、たくさんの事例から、違いを楽しむ風土が大事だと気付かされた。

また、保育士の積極的な態度、柔軟な思想や発想が専門性を高め、保育を豊かなものへと変化させている。現場では今、多様性を認め合うインクルーシブな保育が求められている。違う価値観を身近に感じて、自由や主体性を大事に、人と人とが織りなすような保育をこれからも作って前に進んでいきたい。

## より必要なスキル



- ◆ 同じことをみんなで一緒にする  
伝統的な日本の保育のあり方の改革
- ◆ 保護者の素朴な疑問に丁寧に対話や説明を継続していく力
- ◆ 共に共生するための理解や必要性を学ぶ力
- ◆ 習慣・文化・世界観を互いに理解した柔軟な対応力
- ◆ 人権や意識向上

Doronko  
DORONKO

## ■ フロアを交えての意見交換

多世代・多文化社会における介護・保育の専門性とはなにか、また職員の育成はどうしたら良いのかということにも触れながら、活発な意見が交わされた。

Q. 従来の介護や保育の養成教育の中で、多世代や異文化という視点は身につけていないのではないかと。その中で、現場職員が違和感を抱いている場合もあるのでは？職員教育や職員へのフォローをどうしているか。

大須賀氏は、専門職ですべてを支えきることが難しいことは日頃から職員に伝えており、職員も理解していると語った。専門職だけでできないことや困り事を地域に出し、地域の人に入ってきてもらえるような仕組みを作ることが重要であり、また、活躍できる地域の方を増やすという視点も必要ではないかとの問題提起がなされた。

井口氏は、現場職員への研修の重要性を訴えたうえで、まずは介護の価値観・物差しが外国人職員も含めて共有できること、職員を支える体制づくりの重要性や、外国人職員を「異国の地で懸命に働いている生活者」であることを受け止め、どのように配慮し支えていくか考えていくことが重要であると述べた。



真島氏は、異文化を受け入れることについて、頭では理解できていても実際の場面になると躊躇する職員もいる、としたうえで、どろんこ会では必要時はアドバイザーが介入し、子ども中心の実践になっているか、子どもが生きにくさを感じているようなことはないか、など原点に立ち返るような働きかけを行っていると言った。



Q. 多世代や異文化との交流が、専門性にどのように役立つ、貢献するか。

専門性、専門職は重要だが、これ以上人口が増えない中で、専門職が今後増えていくことはなく、限界がきたのではと感じている、と大須賀氏。様々な支援には専門職による関わりが必ず必要になってくるが、専門職だけで支援を行おうとせず、仕事をリタイアした方、子育て中の方など、専門職だけでは支えきれない部分に、生きがい支援として様々な人に介入してもらいながら、支え合っていく仕組みが求められるのではないかと、との提案があった。

井口氏は、外国人が入ったことにより、日本が築いてきた介護の文化が崩れたということには絶対にならない。介護の職種が大切にしている生活をベースとしたアセスメントや介護過程の展開など、その専門性を削ぐことなく、海外へ向けてしっかりと受け渡していくことが重要であると述べた。

真島氏からは、異文化が入ってくるということは、保育の現場が豊かになることである。「個」が尊重されるとはということなのか、「違いを認め合う」という文化が今後根付いていくことを願っているとの希望が語られた。

■ 閉会の挨拶

閉会にあたり、学校法人敬心学園小林光俊理事長からは、これからの2025年問題、2040年問題を考えたとき、世代や文化の垣根を越え、どう人々が支え合っていけるかということが大きな課題であると述べた上で、本日の登壇者の報告は、既にその支え合いについて、前向きに検討され、確かな実践につながっていること、そしてこういった取り組みを日本全体、さらにアジア全体に発信し広めていきたい、との強い決意が示された。



■ 本公開研究会を振り返って

介護・保育分野における異世代交流、異文化協働の先駆的实践事例と、それを実現させるための仕組みや仕掛けについて、それぞれの登壇者から多くの学びやヒントを頂きました。これからの社会において、また専門職の養成教育や既に現場で働いている専門職の学び直しの機会において、異世代や異文化等の多様性をどう前向きに受け止め、今ある実践をより豊かなものにしていけるか。このテーマはこれから大きな広がりを見せていくことが予想されます。

本公開研究会は、敬心学園が文部科学省から新たに委託を受けた「2019年度 介護・保育分野における異文化間異世代間の交流促進のための分野横断型リカレント教育プログラムの開発事業」の一環である学習会を兼ねて行われました。この事業では今年度、先駆的実践事例の調査や学習を中心に活動していますが、来年度以降は具体的なプログラム開発に入っていきます。

今後の展開にご期待頂くとともに、参考となる情報などがあればぜひお寄せください。（文責：編集部）



前号でお知らせした日程から変更になりました。ご注意ください！

■ 第12回公開研究会

日時：2020年 3月21日（土） 13:30～（予定）

場所：日本児童教育専門学校

テーマ：福祉教育におけるICT（VR）の広がりを考える ～社会・介護福祉教育現場における今後の可能性について～（仮）



詳細決定次第HP等でお知らせします。ぜひご予定ください！

## 紹介

## 中国北京における日本児童教育専門学校の 乳幼児研修の取り組み

### 日本児童教育専門学校 副校長 阿久津撰

日本における人口減少にともない、専門学校で職業教育を受ける学生像も多様な視点で捉えなければならなくなっている。現在保育士不足が叫ばれているが、今後はその質についても強く要望されることは間違いない。人格形成の上で最も大事な乳幼児期において、親も含めその育ちに携わる人の関わり方が、その人の人生に大きな影響を与えることが現在分かっている。日本のみならず、広く世界で乳幼児期の養育のあり方が注目されている。

今回中国・北京を拠点とする教育事業団体、北京聖頓教育グループから、日本の乳幼児保育についての強い関心が寄せられるとともに、是非「現場で活かせる保育」について本校の講師から学びたいという要請があった。昨年の夏に北京で詳細な打ち合わせをした後に、11月にプレとしての位置付けではあったが、3日間の乳幼児研修を本校専任講師2名により実施した。以下主な内容について報告する。

研修の内容に触れる前に、中国の乳幼児の現況や施策について簡単に説明する。2019年現在、中国の0～6歳児の子ども数は約1.2億人といわれており、2018年度の新生児の数は1523万人である。保育環境としては3～6歳を対象とした保育機関（幼稚園、保育所）の数は約25万ヶ所あるが、0～2歳の通う保育所は用意されておらず、統計としても発表されていない。中国は共働き世帯が主であるが、今まで0～2歳については祖父母かベビーシッターが預かってきた。しかし先に述べたような保育の質への期待もあり、質の高い保育所に預けることがニーズとして顕在化している。

このような背景のもと、今回の研修は主に0～2歳に対する保育の基本的事項を主とした内容となった。乳幼児保育に長く携わった講師と、看護師として保育所で勤務経験がある講師が、毎日9時から17時過ぎまで、講義、実技、グループワークを交えながら実施した。

主な内容は、以下表1の通りである。

1日目	2日目	3日目
講義項目、内容		
日本児童教育専門学校の紹介 日本の保育政策について	赤ちゃんの抱き方、おんぶの仕方	保育園での保健活動
保育園の環境づくり(1) 計画と評価	オムツ交換、衣服の着せ方、脱がせ方	保育園での感染症対応
保育園の環境づくり(2) 0～2歳の環境設定	乳児の身体の清潔(沐浴方法)①	乳幼児突然死症候群を防ぐために
保育園の環境づくり(3) 安全対策	乳児の身体の清潔②(沐浴方法の実際)	シュシュ、写真立てを作ってみましょう。
	ミルクの与え方、冷凍母乳の取り扱い	3日間のまとめ

<表1>

実際に3日間の研修を終えてみて印象に残っているのが、中国の受講者たちの熱心さである。近く自身たちが保育所で0歳児を預かるのだという緊迫感の中、どん欲に学びたいという意識が伝わってきた。また脳科学をふまえた子どもへの関わりなど、基礎的なことだけでなく、さらに進んだ内容について学びたいという意欲を感じた。



現在研修に対しての先方のフィードバックを基に、正規版の5日間の研修内容の作成に取り組んでいる。

日本の保育への関心が高まっている中、本研修に関しても今後北京のみならず、中国の他の都市、さらにはアジアの国々での展開も予想される。さらに内容を高めステップアップしていきたい。

## 報告

## ERIA委託事業 ‘Modelling Human Development and Circulation of Long-Term Care Workforce’ を受託

学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター 杵渕洋美

職業教育研究開発センターでは、ERIA(Economic Research Institute for ASEAN and East Asia: 東アジア・ASEAN経済研究センター)の研究事業を受託しました。アジア健康構想の実現へ向けたアジア資格枠組みに関する政策提言を行うことが事業の目的です。

### 【事業概要】

介護事業者が海外においてケア産業を展開するに際して不可欠な経営資源である人材の育成には、海外人材を国内で受け入れ、育成し、帰国後も当該分野で活躍できる“人材還流”の流れを作ることが有効です。そのためには、欧州資格枠組み(European Qualifications Framework: EQF)のような共通の資格枠組みの開発がアジアにおいても急務であると考え、本事業では、人材還流に向けたアジア資格枠組みに関する政策提言を行います。

### 【主な取り組み】

主な取り組みは、フィリピンの実地調査とインドでの介護エントリーレベル実証講座の2つです。フィリピンでは、EPA還流人材の帰国後の活躍ぶりや帰国に際しての課題を把握するためにミンダナオ国際大学等の訪問とヒアリング調査を予定しています。インドでは、介護技能実習生候補者を対象とした入国前トレーニングの実証を、文部科学省委託事業で策定したエントリーレベルプログラムをベースに行う予定です。事業は2020年10月まで行う予定です。

## 告知・募集

### 「敬心・研究ジャーナル」第4巻第1号(2020.6月末発行) 投稿原稿募集! 及び 要領類改定のお知らせ

#### 【投稿: 入稿関連スケジュール】

投稿(タイトル: 題目) エントリー締め切り……2月10日(月)

査読あり原稿入稿締め切り……3月10日(火)

査読なし原稿入稿締め切り……5月10日(日)

【投稿カテゴリー】 総説、原著論文、研究ノート、症例・事例研究、実践報告  
 評論、シンポジウム・学会研究会報告

【投稿先】 職業教育研究開発センター「敬心・研究ジャーナル」事務局 [journal@keishin-group.jp](mailto:journal@keishin-group.jp)

【投稿資格】 原則として敬心学園の教職員、職業教育研究開発センター研究員(編集規程より抜粋)

\* 研究員登録は、RDIセンターへメール [vetrdi-kensyu@keishin-group.jp](mailto:vetrdi-kensyu@keishin-group.jp)

またはHP [http://www.keishin-group.jp/keishin\\_fr/rdi/](http://www.keishin-group.jp/keishin_fr/rdi/) よりお願いします。

\* 投稿に関する詳細は「編集規程」「投稿要領」「執筆要領」をご確認ください(敬心・研究ジャーナル巻末に掲載)。尚、「投稿要領」「投稿原稿チェックリスト」を改訂しています。第3巻第2号、又はHP [http://www.keishin-group.jp/keishin\\_fr/rdi/journal.html](http://www.keishin-group.jp/keishin_fr/rdi/journal.html) をご活用ください。



<変更点のご案内> ※その他の要領についても、よくご確認のうえご投稿ください。

○ 投稿要領 ⇒ エントリー締め切りを明示、査読無しでもエントリーが必要となりました。

また、査読なし原稿の原稿投稿締め切りを延長しました。

○ 『敬心・研究ジャーナル』投稿原稿チェックリスト (エントリー時 と 原稿投稿時に使用)

⇒ 投稿要領変更に伴い、エントリー時と投稿時のチェック項目を明示しています。

告知・募集

## 敬心学園 第17回職業教育研究集会（旧学術研究会）開催概要・演題募集

## 「学習意欲を高める学習方法の開発」

～1人1人の個性や特性を活かした職業人育成のために～

趣旨は、「敬心学園 全教職員による 職業教育の問題点抽出と整理」と「日本の職業教育研究への寄与」  
 今回、学会などで発表した研究内容を再発表することも対象としました。

\*専修学校の教育にかかわる研究はすべて対象（様々な学生が存在する＜専門学校＞としての研究はすべて該当、  
 実践報告、臨床研究、教育のための背景の調査（研究）など、旧来の学術研究会の発表案件は全て対象）です。

講演は、[学びの基礎となる言語技術教育、日本における言語技術の第一人者である 三森ゆりか先生](#)です。

今後の授業に、コミュニケーションに活用してください。

## 職業教育研究集会 開催要項

日 時：2020年6月28日（日）10：00～16：00

（敬心学園の教職員は、基本全員出席してください）

会 場：午前：学校法人敬心学園 日本リハビリテーション専門学校 イセビル（タイムプラザイセ）2F

（〒171-0033 東京都豊島区高田3-18-2）

午後：学校法人敬心学園 日本医学柔整鍼灸専門学校 本校舎

（〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-18-18）

会 費：1,000円（資料代）

但し、敬心学園教職員並びに発表者、職業教育研究開発センター会員は免除。卒業生は500円

プログラム：10：00 開式の辞

（予定） 10：30 講演 三森 ゆりか 氏（つくば言語技術教育研究所 所長）

～ 休憩・移動 ～

13：30 口演・ポスター発表

敬心学園教職員・卒業生・職業教育研究開発センター研究員による分科会



＜三森 ゆりか氏＞  
 撮影 本間信彦

＜演題募集要項＞ \*詳細はホームページを確認してください。

募集期間：2020年4月20日（月）締切

\*人を対象とする研究では、予め所属校や学会などで研究倫理審査を終えてください。職業教育研究開発センターでの審査を希望される場合、2/10・4/10何れかの締切り迄に申請書を提出してください。

募集方法：敬心学園ホームページから[申込用紙](#)、[抄録用紙](#)をダウンロード、記入後メールにて以下へお送りください。

提出宛先：[journal@keishin-group.jp](mailto:journal@keishin-group.jp) ※受領確認を担当よりメールにてお知らせいたします。

ホームページへの開催要項・演台募集要項の掲載は、1月27日（月）を予定しています。

（学園ホームページの「学園ニュース」よりリンク）

\*尚、研究倫理審査を希望される場合は、敬心・研究ジャーナル巻末に掲載の様式2を確認いただき、研究倫理審査の申請用紙（様式1）もホームページより併せてダウンロードし、審査依頼申請を行ってください。（審査の申請日は、偶数月の10日です）


**告知・募集**

文部科学省委託「専修学校リカレント教育総合推進プロジェクト」  
 ～介護福祉事業の管理者養成に向けたeラーニング活用による  
 モジュール型学修システム構築プロジェクト事業～



### 成果報告会

## これからのリカレント教育とは（仮） ～日本における生涯学習の推進に向けて～

日時：2020年2月10日（月）10：00～12：30

場所：アルカディア市ヶ谷私学会館 5階「大雪」

（東京都千代田区九段北4-2-25） ※市ヶ谷駅から徒歩2分

プログラム予定：

**第1部 今年度の事業報告**

**第2部 これからのリカレント教育とは（講演・パネルディスカッション）**

参加費：無料

定員：80名（先着順）

申込：1月20日（月）よりメール・お電話にて受付開始。

学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター 担当 杵渕（きねぶち）・迫（さこ）

Mail：[monka.jimu@keishin-group.jp](mailto:monka.jimu@keishin-group.jp) TEL：03-3200-9074

※お申込みの際は、①お名前 ②ご所属 ③連絡先 をお知らせください。



文部科学省委託「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」  
 ～地域活動による高齢者支援・介護支援の学習プログラムの研究開発事業～

### 成果報告会

## 街（町）と学校の共生のあり方について ～支え・支えられる中で裕（ゆた）かな発展を～

日時：2020年2月15日（土）13：30～16：30

場所：TAP高田馬場（新宿区高田馬場1-31-18高田馬場センタービル3階）

※高田馬場駅戸山口から徒歩3分

プログラム予定：

**第1部 パネルディスカッション「町（街）に支えられる専門学校」**

コーディネーター 川廷 宗之 氏

パネリスト ※調整中

**第2部 専門学校の地域交流「実践から学ぶ」**

コーディネーター 野村 義 氏

シンポジスト 石島 美紀 氏（YMCA健康福祉専門学校）

阿嘉 優 氏・介護学科2年（北海道福祉教育専門学校）

生方 薫 氏・介護学科2年（関東福祉専門学校）

参加費：無料

定員：100名（先着順）

申込：1月15日（水）よりメール・お電話にて受付開始。

学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター 担当 島谷（しまや）・石投（いしなげ）

Mail：[vetr-di-kensyu@keishin-group.jp](mailto:vetr-di-kensyu@keishin-group.jp) TEL：03-3200-9074

※お申込みの際は、①お名前 ②ご所属 ③連絡先 をお知らせください。



※なお、上記2つの成果報告会は、一般に公開されるものです。どなたもご参加頂けますので、ぜひお越しください。

告知・募集

## 新入教員研修会 (基礎教育力養成研修会) 開催のお知らせ

実務から教職へ…  
まずは何からすればいい？

学生だけじゃない！  
教員自身が「授業」を  
楽しめるようになるには？

そもそも「授業」って  
どう創るの？

これから教職に就かれる方、教員になって間もない方、改めて授業のあり方を学びなおしたい方など、ご自身の職業教育に関する教育力の向上を図りたいと願う教員の方向けに、21世紀の職業教育機関における「基礎教育力養成」を目的とした研修会を行います。

学校法人敬心学園の教員を主な対象としておりますが、学外の方にもご参加頂ける研修となっております。ぜひご参加ください。



日 程：以下、①・②のいずれかの日程でお申し込みください。

- ① **2020年3月20日(金) 9:30～16:30**
- ② **2020年3月24日(火)・3月25日(水) それぞれ18:00～21:00**

(食事のご用意はありません。各自ご準備ください。)

場 所：調整中(高田馬場駅徒歩圏内を予定)

受講料：学校法人敬心学園 教職員 ―― 無料

職業教育研究開発センター研究員 ―― 2,000円

職業教育研究開発センター会員 ―― 1,000円

一般 ―― 5,000円

申 込：[vetr-di-kensyu@keishin-group.jp](mailto:vetr-di-kensyu@keishin-group.jp) まで、【1.お名前、2.ご所属、3.ご連絡先(Tel又は☎)、4.希望日程(①又は②)】を明記のうえ、お申し込みください。

内 容：学生支援事業・教育サービスと教員の役割・姿勢

職業教育における授業の展開

授業設計とコマシラバス、授業案の作成

ワークショップ(模擬授業・授業時コミュニケーション技術等)

<お問い合わせ・申込み>

職業教育研究開発センター 担当：藤井(ふじい)

Tel:03-3200-9074 Mail: [vetr-di-kensyu@keishin-group.jp](mailto:vetr-di-kensyu@keishin-group.jp)

次号予告 2020年4月15日発行予定

<特集> アジア各国からの期待に応える国際的な介護福祉教育のあり方を考える(仮)

<報告> 第12回 公開研究会 開催報告

2019年度 文部科学省委託事業 取り組みの報告 ほか

